

また新たに二才の春を迎ふ
うつし見ることしの空や宮戸川

露心
旧瓦書 ㊦

㊦ 晴霞仏(多代)追悼摺

辞世

終の世はまくらも上す四日月

晴霞佛

光りの、こる草の葉の露

男 桃丘

なめす、きとる間に釜の水さして

清民

返事ひとつを又き、に遣る

曾孫 せん女

火振にもふかき臙やか、るらん

孫 晴山

朔日はふ春の蔵元

曾孫 旧池

下略

諸君所賜の玉章皆前文有其長短悼み深切也

前文なくては句意通せず然れば祝しかたきもの
なりされと紙上にかきりあれば遺憾ながら前書
を省き侍る寛恕見ゆるし給へと告す

おもひやる空のかきりや四日月

武蔵 為山

見る人のひとり成けり秋の月

春湖

もとの木に帰りやうなし風の露

氷壺

待は来て本意なき雁の便かな

等栽

稲に風たしかな果をきく夜哉

芳草

したはしき日頃成けり露しくれ

荷少

枯萩の匂ひもさそな信夫山

木和

露寒やよみし手紙を膝の上

きく雄

人の袖ぬらすや折し女郎花

甘茶

みちのくの秋風今や身にしみぬ

三支雄

入月やきてもむかしの軒の栗

大虫

月の萩ちりしあとまで芳はしき

鳳雛

月は入はて、身にしむ夜かけかな

弘美

たよりなや秋をしくる、葱草

五休

菊もみち花ちる忌日くかな

五渡

留主の間に名の木散けりても扱も

上毛 白亥

初手からのこと先立て袖の露

下毛 其翼

常ならぬ便きく夜や萩の声

常陸 鶴巢

こほれても残れる露の光り哉

谷明

このもしきうしろすかたや月を友

加賀 大夢

ゆく人も月も西なり影法師

越後 雅佛

秋風やおもひまうけぬ此ゆふへ

信濃 春海

をしまる、夜のはしめ也三日月

出羽 素山

便なきたよりの淡し露の秋

二葉

膝折て聞直しても秋の声

江春

散る花は老木もおなし名残かな

桜山

世の人にしらなて散し芙蓉かな

尾張 唵風

みか月も見はて、けふの仏かな

梅裡

おもむきを残して菊の枯にけり

我亮

もう見えぬ月の更ゆく雲いく重

武貫

かれてさへ香は玉なすや池の蓮

如俤

吹暮た夜も秋風の光りかな

静處

夕かすみあたら栖のかくれけり

士前

穂す、きや風に散ゆく九十九髪

近江 乙也

破るまてうるはしかりしはせをかな

京 黙池

さひしさの旅またかなし秋の暮

赤甫

おもはさるたより聞夜の時雨かな

東樹

何やらかさひしくなりぬ露時雨

兔尺

此世より月清からん君か旅

公成

この道やゆく人出来ぬ秋の月

阿波 萬像

見馴たる花野の花や手向草

函館 葱玉

翌日を期す枕とせしか三日の影

松前 風逸

かをるほと猶をしまれて月の梅

江差 一昇

芋の子や徳に報ゆる手向もの

安達 児川

名月もかきりのありて西へ入

丁西

いた、きし筆にも柿を手向かな

安積 隣々

柿の蒂ともにちからもぬけにけり

黙齋

露の玉こほれて草の動きけり

松月

菊の香を残して秋は暮にけり

白川 素磴

吹はつとおもへとかなし秋の風

会津 梅溪

俯の添うて露散あしたかな

湖山

晚鐘は常にもあれと秋の暮

松甫

をしまれて朽ぬ名なれや菊の花

布山

宵月も入て俄に夜寒かな

信夫 袋蜘蛛

とり付てむしも鳴也草の露

伊達 富山